

断片夢想地図

○
アルドロッシドローイング研究

私は先行研究にてアルドロッシのドローイングの研究を行った。ロッシは都市のイメージの確認方法としてドローイングを用いていた。彼にとって都市は建築であり、家具も建築であった。存在しているオブジェクトは彼にとって建築であった。彼の「類推的都市」の中にも、そのような論理を見ることができた。彼の捉えているオブジェクトをコラージュし、集積し、ぶつけあうことによって、彼は彼なりの都市やまちのイメージを捉えていた。彼の都市を多次的に見ることが可能な論理を現在の日本に適応させる必要があると私は感じた。その理由として、日本や世界などの人間の生きる場は、情報化などによって人間が生きる場がアンリアルになってきていると感じた。言い換えるならば、人間の都市体験が断片化しているのではないかと感じた。ロッシのドローイングは30年前に描かれ初めたが、その論理を今もう一度日本に適応させるべきではないかと感じました。彼のドローイングを分析してみると、彼の設計したものから、都市のエレメント、都市の風景から、家具などの日常のスケールまでを混在させることによって、それぞれの印象をドローイングの中のスケールをいじることによって、実質的な大きさもつイメージではなく、そのオブジェクト自体がもつイメージを確認していた。ロッシのドローイングでは、オブジェクト1つ1つの意味がとても大きなものになっている。1つ1つの意味が大きいのは、とてもヨーロッパ的である。ヨーロッパでは、広場や教会などの1つの建築が中心の意味をもつと同じように、彼のドローイングでもそれぞれの要素の持つ意味に留意しながら、ドローイングを描いていました。

○
アルドロッシから日本へ



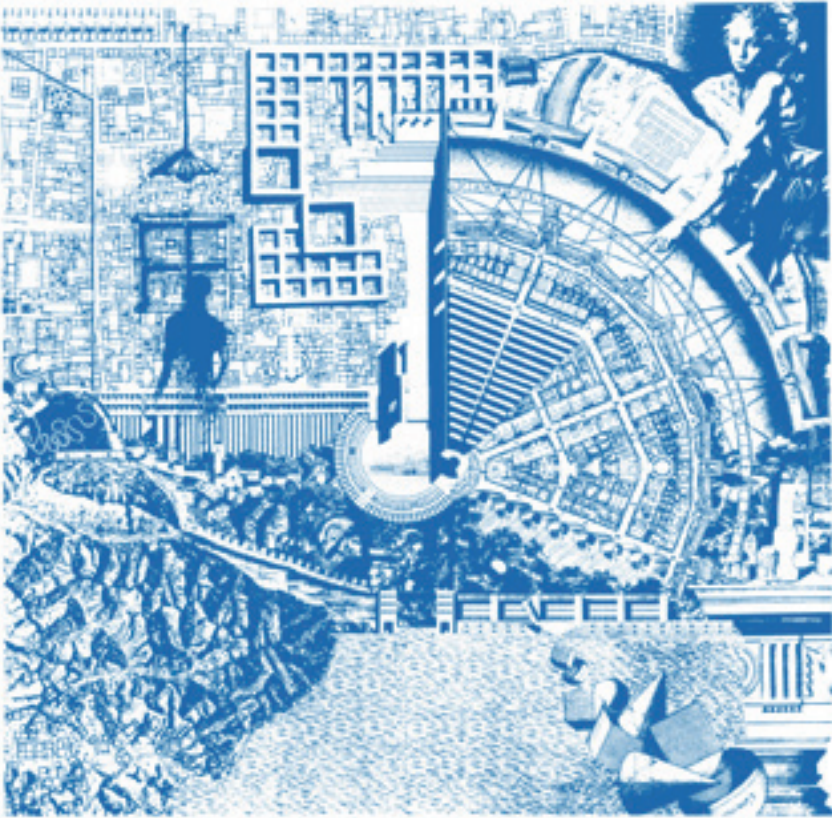
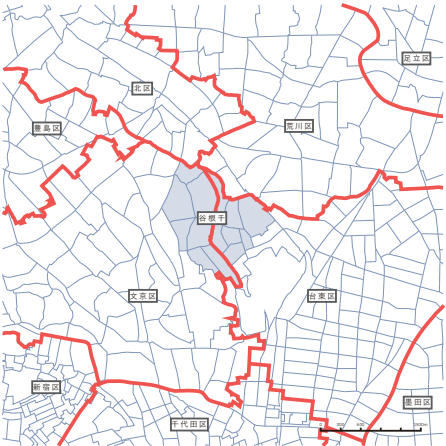
ロッシの本の中では、この絵のようなフォロ・ロマーノのような場が都市の記憶の中心、周辺にある記憶を想起させる場となっていたと論じていた。ヨーロッパの中心が存在している状態は、このような広場のような空間が中心を形成し、都市の記憶を支え、共同体の記憶となり、言い換えるならば集团的記憶であった。ロッシはこのような建築を都市的創成物と名付け、都市の中の重要な位置づけとして、都市的創成物を探求していた。



ロッシの都市的創成物を日本に適応させるときに、都市空間にフォロロマーノのような建築、都市の中の断片は存在しているか、探してみても見つからなかった。日本にはフォロロマーノのような、都市的創成物は存在しないのだ。日本に日本に存在するのは、都市的創成物ではなく、都市的創成群であった。日本の都市のイメージを形成していたのは、断片が集合した、都であった。それぞれの単位では、何気ない日常の延長として存在しているものだが、これが集合することによって、都市全体の記憶を形成していたのだ。

○
谷中根津千駄木へ

これらの論理を当てはめる場所として、谷中根津千駄木からなる谷根千を選択した。谷根千は江戸時代から発展を始めたまちである。現在でもいきいきと都市の空間は残っているが、再開発の波にもまれ始めている場所でもある。この谷根千は歴史が重層することによって、たくさんの時間軸を有し、その時間の重層によって、すでに都市が断片的にできているといっても過言ではない場所になっている。



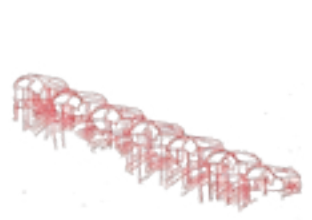
○
アルドロッシ「類推的都市」



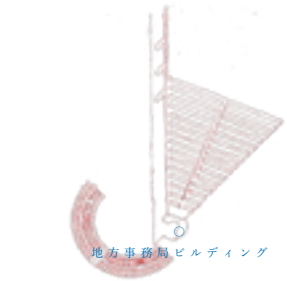
○
要素分解



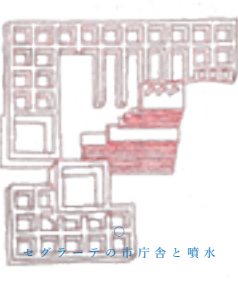
○
アルドロッシ「類推的都市」



○
ボルゴ・ティチーノの山荘



○
地方事務局ビルディング



○
セグラーテの市庁舎と噴水



○
エルバの木小屋



○
古代オーダー



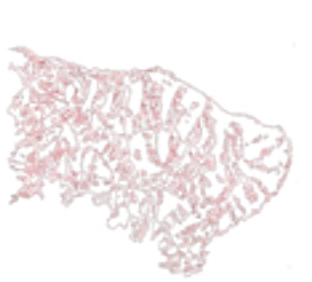
○
アルドロッシの意と日常生活



○
山荘み



○
プラトン立体



○
山



○
ガララテーゼの集合住宅



○
神

断片夢想地図



日本的な描きかた

日本的な描き方を作成するにあたり、私は人間が都市の中でどのように都市を認識するかをヒントにドローイングを描いた。

1

人間が道を覚えるときには、グーグルマップが頭に入っているわかでもなく、鮮明な写真の中に矢印が描きこまれているわでもない。



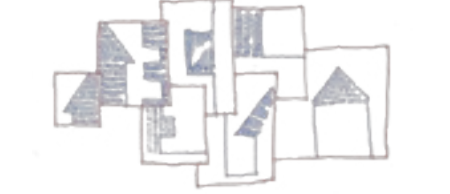
2

道を覚えるときには、建築の断片をモチーフ化し、これが見えたら右とか、このまま真っすぐでも大丈夫などと、まちにおちるオブジェクトを断片化し、道を覚えているのではないのでしょうか。



3

このような人間が道を覚える手だてとなるオブジェクトを連鎖的に描き、これを都市を捉えるための新しい地図として描き出した。この地図には、都市全体のイメージもありながら、まちとしての小さなスケール、家具のスケールも包含した、すべての概念地図である。



谷根千らしき

谷根千をリサーチしてみると、谷根千独自のボキャブラリー、らしきを発見することができた。このらしきは谷根千の魅力を支えるものでもあり、人の営みの水準をあげるものでも、豊かさを形成している要素でもある。

自然的要素



非視認性



スケールの混在



路地の集積



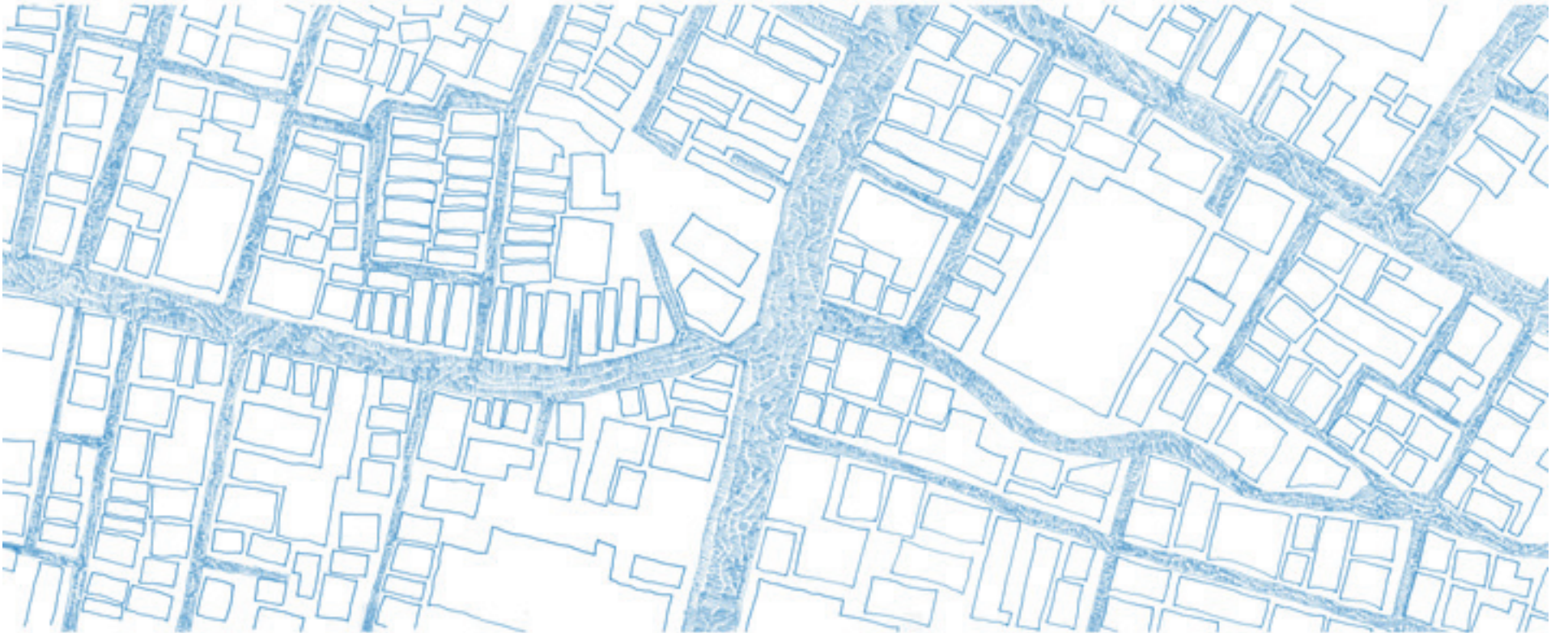
時間の重なり



多種多様な人間



谷中の普遍的な地図



断片夢想地図

下に描かれたドローイングが断片夢想地図である。人間が記憶するときに使うモチーフ化されたオブジェクトを集積したものになっている。

具体的には、地図を印刷したものにその位置に落ちているオブジェクトを描き、描く。

このような描き方によって、人間が覚える都市を描き出すことができる。都市の中の関係性。断片が持つ全体性。都市にある全体性を神様のような目線で見るのではなく人間の体験の中で感じる全体性をこのドローイングによって構築できている。

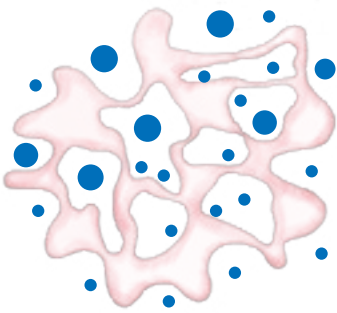


断片夢想地図

○
らしきの居所

谷根千らしきは1つの場、1つの建築に留るのではなく複数の場をつなぐネットワークとして存在していた。そして、この断片夢想地図は、このらしきも同時に描くことができていた。

このらしきの居場所を1つの建築へと昇華させ、谷中根津千駄木の中で記憶の中心地を創成する。

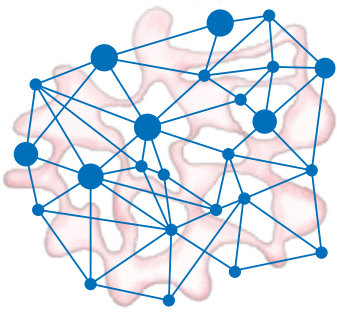


谷根千らしきの居場所



建築（機能を有した場）

谷根千らしきは建築の間を縫い、谷根千らしきのネットワークを作るように、まちの中に散在している。



谷根千らしきの居場所



建築（機能を有した場）

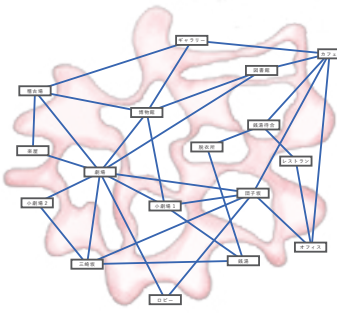


機能同士のネットワーク

そして、谷根千らしきは建築の内部に留るのではなく建築の間、機能の間に存在していた。

私が描いたドローイングは知らずの間に

その谷根千らしきのみを描いていたことになる。



谷根千らしきの居場所



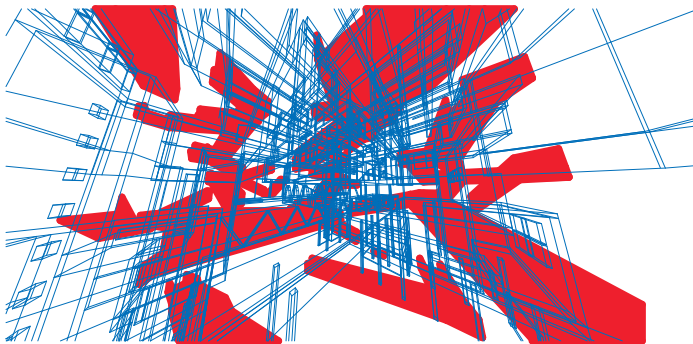
建築（機能を有した場）



機能同士のネットワーク

この谷根千らしきを建築に転用する。

谷根千らしきの元となる種を建築の機能に置き換えその間に先ほどのスタディの断片要素を挿入していく。

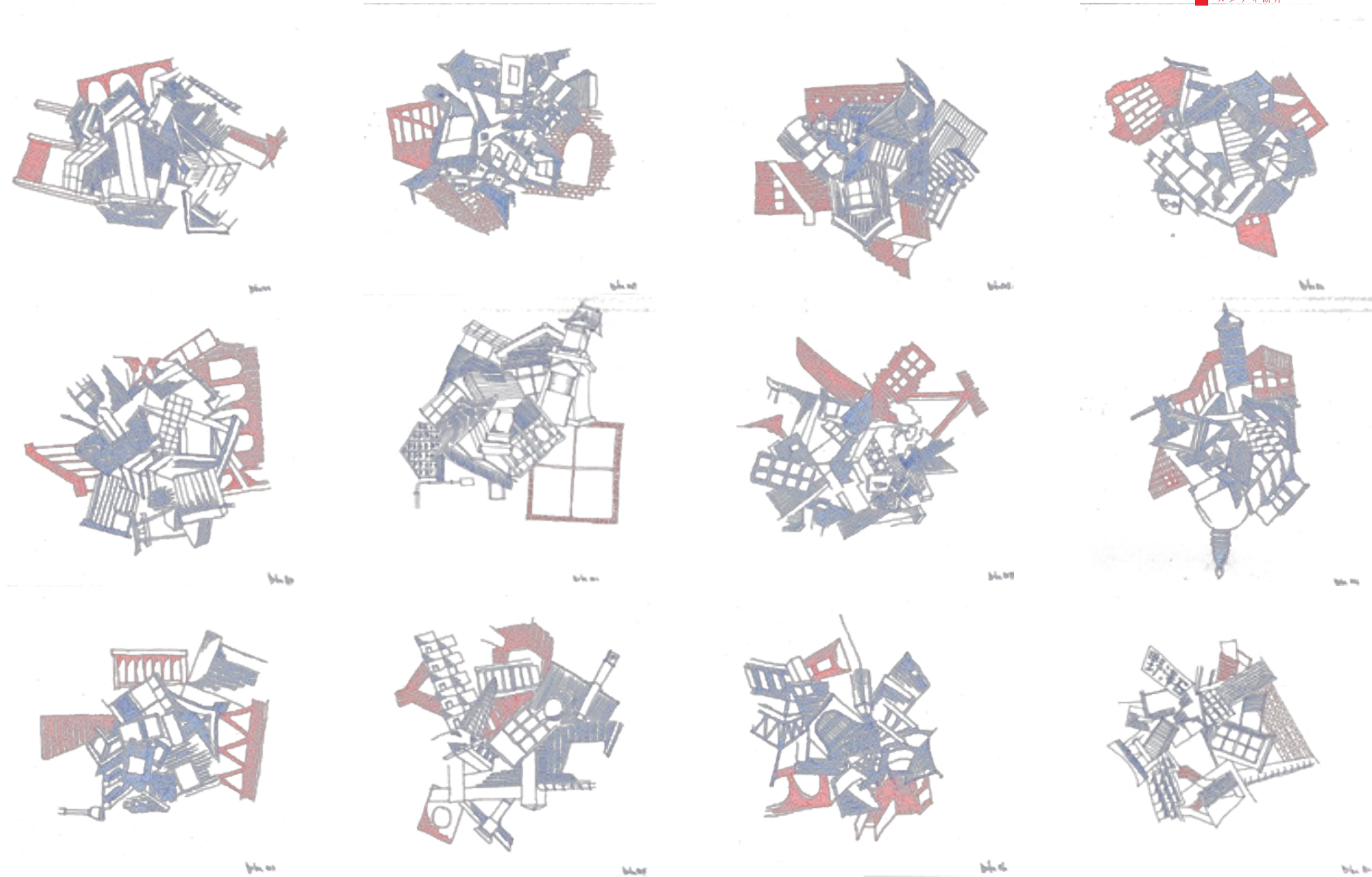


○
らしきダイアグラム

断片のスタディから見出した断片のスタディ、この建築空間を体験するシーケンスに当てはめていく。そうすることによって、この建築が強い体験となる。

■ 既存断片図

■ スタディ断片



○上

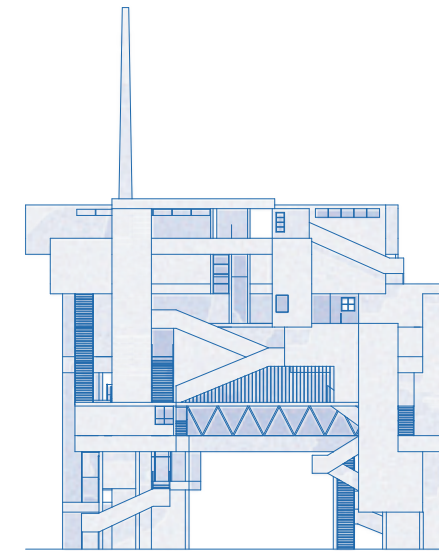
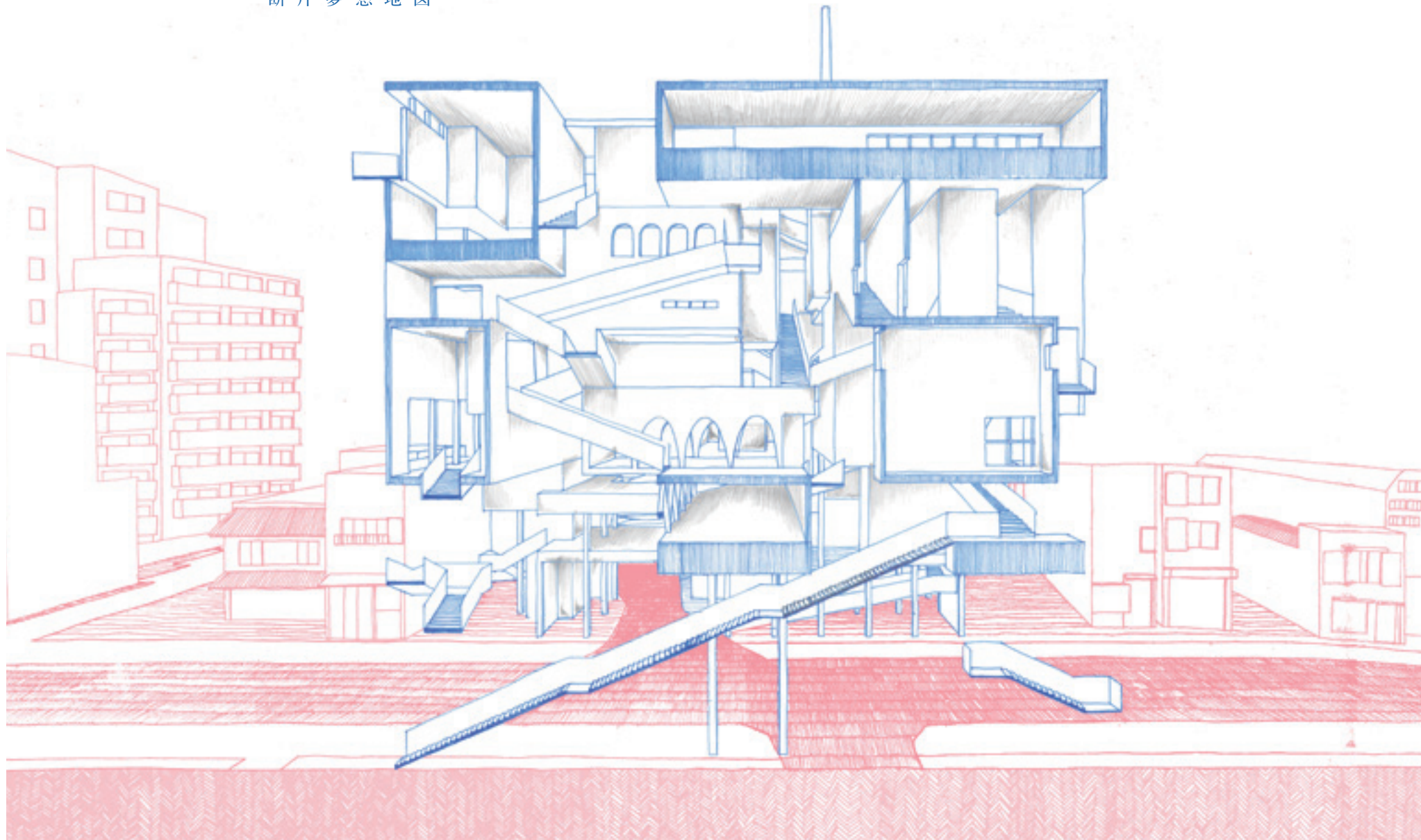
先程の断片夢想地図は記憶の中の都市の敷地模型といえる。この記憶の模型の中で、設計した建築の断片がどのように出現するかスタディしたものがこのドローイングである。建築の断片が都市の中でどのような強さを有するかを構築したものである。

○下

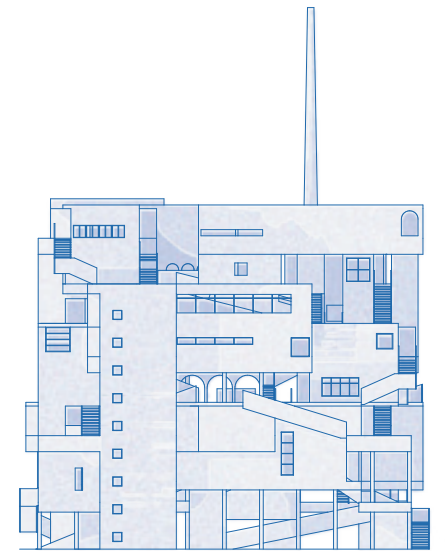
断片の記憶の中で構築し、決定されたエレメントを下のように建築に挿入した。この建築は、シーケンスの中で記憶の断片が連鎖的に展開されていく。この場所を体験することによってこの建築は想起の場となる。



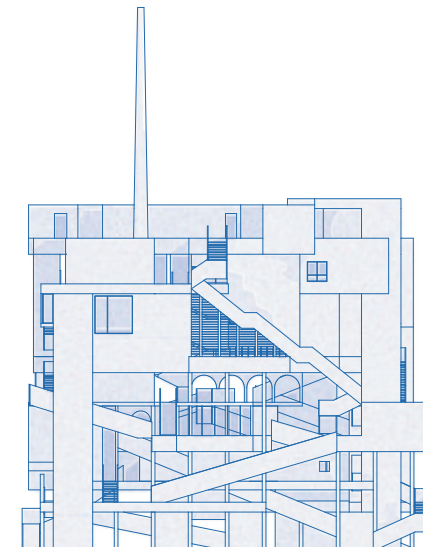
断片夢想地図



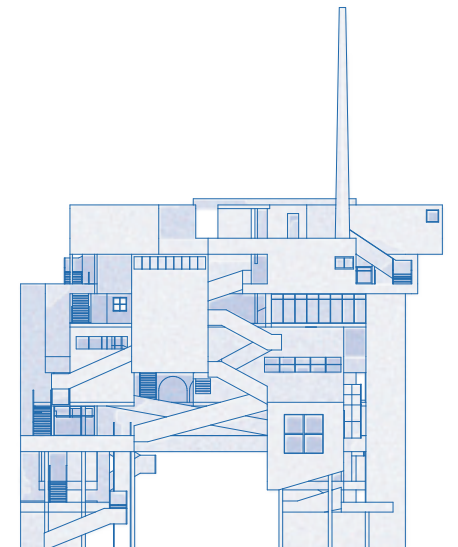
西側立面図
S:1/400



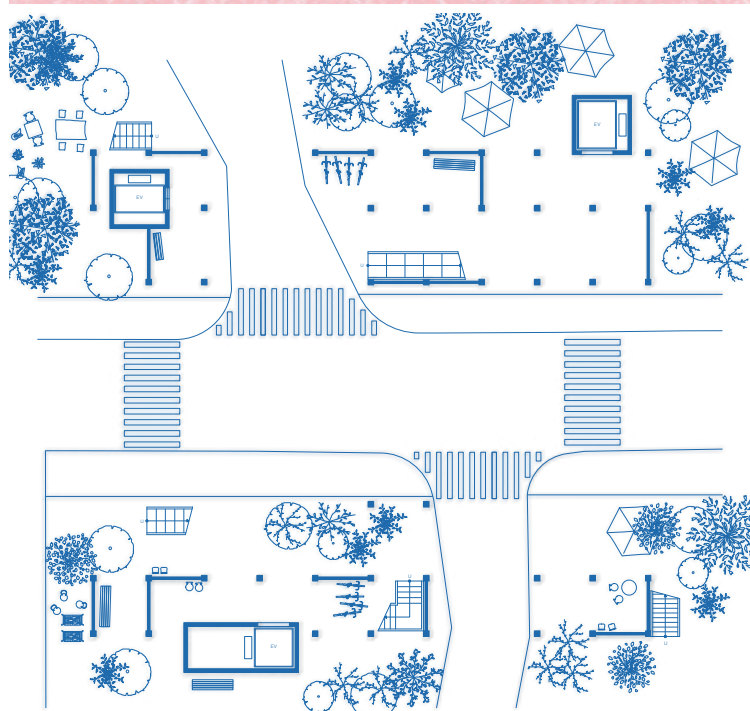
南側立面図
S:1/400



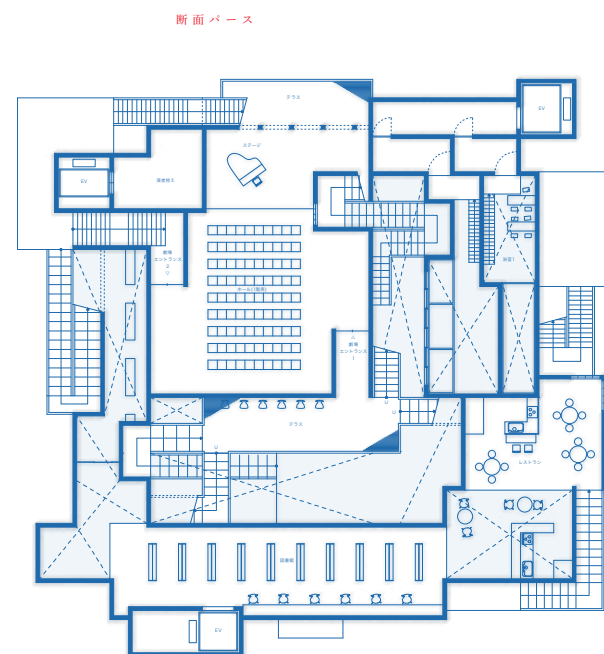
北側立面図
S:1/400



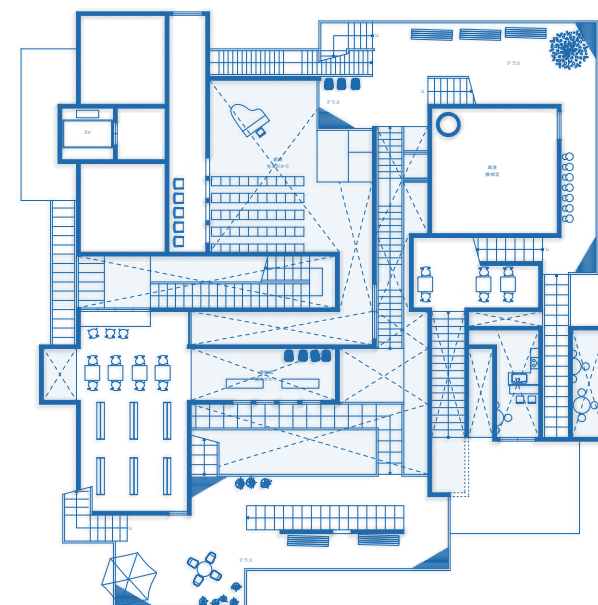
東側立面図
S:1/400



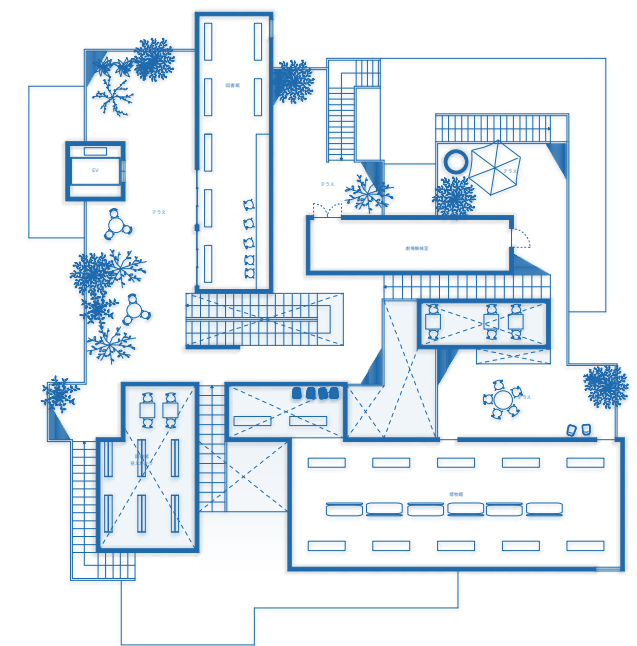
平面図 1
GL+1500
S:1/200



平面図 2
GL+15600
S:1/200



平面図 3
GL+21500
S:1/200



平面図 4
GL+25200
S:1/200

